

第226回 「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の句会開催

11月も中日を過ぎますと、朝夕、肌を刺すような風の冷たさに遭遇することがあります。今年はいつまでも夏が終わらず、「夏からいきなり冬へ」という感じがしている昨今です。最近の「元気に百歳」クラブ内での関心事は、12月6日に開催される忘年会のことと、年末までに発刊される「クラブだより」冬号の準備だと思います。余談ですが、俳句サロン「道草」でも、仲間が詠むそれぞれの代表的な冬の一句を、掲載させていただいております。

今月の句会は、通信句会では下述の通り全員18名が参加し、11月10日（金）の選句を中心とした対面句会には、新橋ばる一んに下述の10名が集まり、提出句に対するご自身の選句の経緯や疑問に思うこと、アピールしたい表現方法などについて、ディスカッションを楽しみました。

○ 今月の兼題 「冬の季語」を持つ三句の作成

○ 投句参加者（18名）

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

対面句会参加者（10名）

創風さん、明峰さん、栄女さん、柴楽さん、傘吉さん、多佳さん、荻女さん、和感さん、晶如さん、白然。

今回のディスカッションでは、天賞に推挙する4票を含み、全体としては5票を獲得して最多得票賞（☆印の一句に選句された、高瀬荻女さんの句「文化の日古書店街のナポリタン」についての質疑が集まりました。この句が『提示された兼題「冬の季語」の句として、適切でしょうか。季語「文化の日」は、晩秋の季語ではありませんか』というものでした。

冬の季語の有効期間は、一説では「立冬の日（11月8日頃）から、次の立春の日の前日（翌年2月4日頃）まで」と言われています。そうすると「文化の日」の句は、大きく捉えても「秋の句」ということになります。句意は『作者は毎年「文化の日」には古書店街に出て、良書を見つけることが「暮らしのルーティン」になり、楽しんでいらっしやるのではないのでしょうか。そして、昼食はいつもの店で「ナポリタン」を食べることも楽しみの一つです』というものでしょうか。天賞に投票した4名の読者は、このナポリタンに共鳴し、共感を覚え、1票を投じた訳です。「季違い」という問題よりも、作者の古書店街での行動の懐かしさの方が、選句の条件として優先したと思われる。

ご高承の通り、俳句は十七音という極めて短い言葉で表現する「座の文学」です。集まった方々と感動を共有し、投票によって座の皆さんから称賛を戴く文学です。そのために季語というルールを作り、ルールの範囲の中で楽しむゲームです。ただ、人間が作るルールですから、判定基準の際の問題になると、多くの矛盾が発生しています。小西甚一著「俳句の世界」の中で、先生は次のように言われていますので、抜粋します。少し長くなりますが、お付き合いして下さい（なお、本文は昭和27年11月の初版の序からの抜粋です）

『・・・俳句は鑑賞批判の規準がおそろしくまちまちで、どれに従ったらよいのかわけがわからないからである。どうしてこんなに乱暴なのか、どこかに統一的な規準は無い

ものか。こんなことをよく訊かれるが、事実、統一的な規準なんか、どこにも無いのである。これが俳句の理解をひどく困難にする。

この困難をのりこえる方法は、私の観るところ、ただひとつしか無い。それはすべての作品や作家を、歴史的な「流れ」のなかに置いて理解することである。おそろしくまちまちな主張や表現は、それぞれ歴史的に秩序づけられ、あるべき位置におかれるとき、なるほど、こんなわけだったかと、理解がゆく。その「なるほど」が、非常に大切なのである。・・・』

「文化の日」が、秋の季語か冬の季語か、という争点を論じているときに、筋違いの話ではないかと思われるかもしれませんが。ですが、俳句の世界の曖昧さというものは解るのではないのでしょうか。芭蕉の時代の俳諧の世界、明治以降の子規時代の俳句の世界、更には軍国主義のはびこる終戦時の世界、第二次世界大戦以後の昭和の平和時代と、俳句を取り巻く様相を変えつつも、あらゆる場面でのまちまちな規準はそのまま変わっておりません。

今回の「ナポリタン」の句の抱える問題も、わが「道草」という座の皆さんが、古書店街のナポリタンという懐かしさを優先させました。そして「11月に入れば、俳句の世界では冬です」をも優先させました、如何でしょうか。ここからが提案ですが、「道草」の在り方としては、こういうケースでは懸案事項として未解決のまま置いておき、その日は未解決に終わっても、調べて正解を把握し、その解を次回の句会には持参するという形で解決していくことにしませんか。その内に、きっと全員の考え方の方向というか、フェーズが合ってくるように思います。

今回は、ディスカッションの経緯を句会記録の中心としたいと思いますので、後は今回の選句で、皆さんに選句された優秀句の記載のみとします。

今月の優秀句

◎『文化の日古書店街のナポリタン』	荻女	天4☆5
◎『我が影の遠くに伸びて冬の駅』	明峰	天2☆7
◎『浅漬けや音も馳走と夫のいふ』	多佳	天2☆5
◎『柔らかかに結ぶ手のひら雪蛍』	晶如	天2☆5
◎『盲導犬小春日和の優しい目』	栄女	天2㊦3
◎『小夜時雨外しては掛け老眼鏡』	栄女	天1☆5
◎『角打ちで冬日背にして友と飲む』	創風	天1㊦4
◎『口遊ぶひとり爛酒艶歌節』	傘吉	天1㊦3
◎『小春日をニコライの鐘ごんがらん』	まさあき	天1㊦2
◎『漆黒の空にうつすら雪の富士』	一光	天1㊦2
◎『大根を洗ふ盥のにごり水』	白然	天1㊦1

12月の対面句会は14日（木）です。季語には「年の暮れ」もありますように、私たちには何か、押し詰った気分がして参ります。また新年を迎えるにあたっての心構えも出来て参ります。用意周到の準備をして、年末に相応しい楽しい句会に致しましょう。

ではまた、12月14日にお会いしましょう。

（白然記）